



イチゴ「愛きらり®」の品種特性を生かした 新作型をご提案します！

— 局所温度制御により収穫開始時期の前倒しを実現 —
開発の背景・ニーズ

イチゴの出荷は11～12月に本格化しますが、年内から厳寒期にかけては需要に対して供給が少なく、高値で取引されます。そのため、苗を短日夜冷処理して花芽分化を促し、収穫開始を早期化する超促成作型が導入されています。

イチゴ「愛きらり®」(登録品種名「愛経4号」)は愛知県とJAあいち経済連が共同開発し、2024年11月に品種登録された新品種です(品種登録番号：第30500号)。花芽分化が早く、早期出荷に適しています。そこで、品種特性を最大限に活用し、局所温度制御によるクラウン冷却を行ってさらに収穫開始を早期化する新作型の開発に取り組みました(図1)。



愛きらり®
(品種名「愛経4号」)

成果の内容

短日夜冷処理で花芽分化した苗を、従来の超促成作型よりも約1か月早い8月上旬に定植しました(図1)。定植直後から9月中旬にかけて、冷却水を循環させる局所温度制御によりクラウン部(生長点がある株元の部分)を冷却し(図2)、期間を通してクラウン部を25℃以下に保つことができました。その結果、短日夜冷処理した苗を9月上旬に定植する従来の超促成作型にくらべ、第1花房は約1か月、第2花房は約2か月早く開花し、収穫開始から12月までの年内収量が約36%増加しました(図3)。栽培試験の結果に基づいて収支を試算したところ、装置の減価償却費用と電気代を差し引いても10a当たり年間約96万円増収する結果になりました。

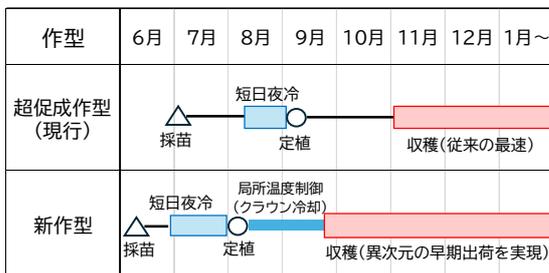


図1 短日夜冷処理による現行の超促成作型と、短日夜冷に局所温度管理を組み合わせ開発した新作型



図2 局所温度制御によるイチゴのクラウン部の冷却



図3 超促成作型と短日夜冷+クラウン冷却作型の年内収量比較

愛知県農業への貢献

「愛きらり®」の品種特性を活用した新作型を導入し、今までにない時期に、今までにない高品質のイチゴの生産・供給を実現することにより、愛知県産イチゴのブランド力向上と生産者の収益増加が期待されます。